第７回「日中未来創発フォーラム」（北京）参加報告レポート

慶應義塾大学
法学部３年
岡本璃央

５月９日から１２日の４日間、「日中未来創発フォーラム」の日本側参加者として中国・北京へ訪中するという貴重な機会を得た。渡航の主な目的として、同フォーラムへの参加を通して、中国人学生とのフィールドワークや議論を行い、日中の相互理解を深めることであった。日本からは、私を含む６人の日本人大学生が訪中し、人民大学では中国の大学に留学する日本人学生、日本語を専攻する中国人学生が一同に会し、学びの多い４日間となった。その他の日程では、天安門広場や景山公園、南路鼓巷を観光し、伝統と現代が共存する北京の街を体感することができた。

１　日中未来創発フォーラムについて

日中未来創発フォーラムは今年で７回目を迎える。今年は、中国人民大学の２つのキャンパス内で行われ、初日は、教授陣による講義、テーマごとに分かれたフィールドワークののち、新設された通州キャンパスに宿泊した。

特に印象的だったのは、フィールドワーク先で体験した、AI 技術を用いた教育ツールの活用である。私は「教育」チームに参加し、AI 技術による通訳サービスを提供する企業を訪問した。そこでは、リアルタイムで５言語以上に同時翻訳されるタブレットや、文法チェック機能付きの最新型コピー機が展示されており、技術の進歩に圧倒された。同時に、中国国内における教育格差や、それに伴う情報格差など、技術の発展の裏に取り残される存在があることを知り、教育体制にも興味がわいた。

また、２か所のフィールドワークを通じて、巨大なスクリーンに映し出されたプロモーションビデオや企業での丁寧な説明など聞き、中国は国全体として、ある種の自己宣伝に長けているように思った。この点に関しては、日本との感覚の違いのようなものを感じ、興味深かった。

２日目は、フィールドワークの内容を踏まえ、AI を用いた教育について議論を行った。ほとんどの中国人学生が日本語を使った議論ができる一方で、自身の語学力では思うように意思疎通できず、もどかしい場面もあった。内容に関しても、互いに母語ではない言語でのコミュニケーションのため、内容の深さに限界があり、議論の幅を狭めてしまうことを痛感した。今回の議論を通して、言語を超えて伝え合うためには、相手を理解する姿勢が鍵となると考えた。メディアの情報だけではなく、直接自分自身で見て聞いて感じたことを大切に、相手を知ろうとする気持ちを持ち続けたい。

２　中国・北京社会について

私にとって北京への訪問は今回で２回目であった。初めて北京を訪れた際に、北京の過ごしやすい天候や、美しい街並み、豪華な食文化に魅了され、また行きたいと北京への再訪を心待ちにしていた。

今回、我々は５月の初旬に訪中したこともあり、柳の綿毛が空を舞い、心地よい風を感じることができた。移動中のバスからは、西洋の建築技術が残る昔ながらのホテルや、赤い文字の看板が目を引く商店が見え、現在と過去が混在する中国特有の雰囲気が印象的であった。また、景山公園の周りでは、二胡を演奏するご年配のグループや、石畳に腰かけて本を読む人など、穏やかな北京の日常を目にすることができた。日本で報道される中国は騒がしく、時に危険な国であるという否定的なイメージが多く、同世代の友人も中国へ行きたがらないことが多い。しかし実際は、ゆっくりとした時間が流れる現代的な都市であり、自身の目で他国を捉える重要性を改めて感じた。

また、印象的だったのは、景山公園から望んだ故宮の眺めである。碁盤の目の如く真っすぐに並んだ故宮の景色は、遠くまで永遠に続いているかのように錯覚するほどの絶景であった。日本に帰国後、中国出身の友人に景山公園からの景色の写真を見せたところ、「空気が濁っている」との意外な反応を受けた。私はむしろ「空がきれい」と感じていたので、中国の方から見た自国の風景への視点に驚かされ、同じものでも見る人によって印象が異なることを感じた。

今回、改めて中国の魅力に気づくと同時に、新たな学びも多くあり、中国への更なる理解を深めたいと夢が広がった。知っているようで、知らない中国。何度訪れても、新たな発見がある。それこそが、私が考える中国の魅力である。

最後に、笹川平和財団をはじめとするプログラムに携わっていただいた全ての皆さまに、今回の貴重な機会について、心よりお礼申し上げます。